

[自治労長野県職員労組木曾支部・村田 吉弘]



3日目は防砂林に信州の雑木林から採取した木の種子を埋めました。

種子を用意した北信の小日向さんは今回がなんと10回目のボランティアで、この1年間で通算30日になるそうです。そのお人柄やあふれる情熱に圧倒され、また「被災地支援の形」を考えさせられました。

発災から1年という節目を迎えましたが、被災地の復興はまだまだこれから。今後も様々な形で継続した支援活動を行っていきたいと思います。

[長野県職員労組木曾支部・米山 幸良]

ボランティアツアーの一員として参加するチャンスに恵まれ、8時間近くバスに揺られて現地にとどり着いた。

我々が担当した作業は草刈り。皆が黙々と草を引き抜き、根を張った箇所はスコップで掬い取っていた。

綺麗にしておかないと、家具などの不法投棄が止まらないらしい。

人海戦術で片端から草を引き抜き、2時間弱の作業で100袋を軽く超える土嚢の中に納まった。

これからハード面で素人が手伝えることは限られてくるが、一人一人が出来ることを愚直に考え続けていくことこそが復興につながっていくと考えている。



[自治労安曇野市職員労組・高橋 恵子]

東日本大震災から一年。「私に何ができるのか、自分の目で被災地を見てみたい。」そんな思いで初めて復興支援ボランティアに参加しました。

被災地は土台だけの家、瓦礫の山、壊れた車の山、仮設住宅など震災の大きな傷跡が残っていました。

一日も早く各都道府県が早く瓦礫を受入れ、新しい町づくりに取組んで欲しいと思います。

今回悪天候で思うように作業が出来ませんでした。葛蒲田海岸に蒔いた種が芽を出し被災地と共に元気に成長してくれることを祈念します。

二日目、ボランティアセンターのスタッフや、同じ思いで参加した仲間と交流したことで被災地のみなさんと絆ができた気がしました。これからはもっと役に立つボランティアを目指して頑張りたいと思いました。

連合長野、長電のみなさん大変お世話になりました。今後も是非継続して多くの仲間を被災地に連れて行って欲しいと思います。

[自治労安曇野市職員労組・小澤 祐子]

今回私は、初めて復興支援ボランティアに参加しました。

震災が起きてちょうど1年経ちましたが、実際に被災した場所を目の当たりにしたときは、想像以上の光景に呆然としてしまいました。

街中はだいぶ活気が戻っていましたが、海岸沿いは手の付けられていない場所もたくさんあり、まだまだ支援が必要だと感じました。

今回は天候が悪く、ボランティア活動はほとんど出来ませんでした。七ヶ浜町のボランティアセンターの方たちが被災者の方々との座談会を設定して下さい、貴重なお話を聞くことが出来ましたし、ちょうど1年経ったということで追悼式にも出ることが出来ました。

あまり力にはなれませんでした。とても貴重な経験をさせていただきました。これからも出来る範囲で支援をしていきたいと思えます。

[電機連合本多通信工業労組松本支部・松尾 智光]

被災地を訪れ強く感じたことは、一年経過した今でも復興はまったく始まっていません。

震災直後と比べれば倒壊した建物や漂着物は取り除かれ、一見、奇麗になっていましたが、瓦礫は同じ地区の集積場へ集められただけです。また家の基礎だけを残した土地は放置されたままです。おそらくそこには相当量の瓦礫がまだ埋もれているはず。これは七ヶ浜町だけの事ではなく、すべての被災地がまだ同じような状態にあるのではないのでしょうか。

菖蒲田浜は今夏に海開き出来るようプロジェクトを進めているそうです。しかし海中は全く手がつけられておらず、今でも多くの瓦礫や漂着物が埋まったままです。これを取り除くにはダイバーの方々の協力が不可欠だとおっしゃっていました。まだまだボランティアの手は足りないのが現状です。

文中に「瓦礫」と一言で表してきましたが、被災された方たちにとっては生活を共にしてきた大切な必需品であり思い出の詰まった家屋です。私たちにとって瓦礫で違和感はありませんが、被災者にとって複雑な思いで聞いていたに違いないと思えます。

この東日本大震災から復興するためには、この先、何十年と時間が掛かります。

私たちにできるのは、この震災を絶対に風化させない事であり、自分たちの出来る形で構わないので協力を継続する事ではないかと思えます。

様々な形での協力があり共に前へ進むことで再生されていくのだと強く感じました。

[電機連合本多通信工業労組松本支部・胡桃 昌二]



今回の復興支援ボランティアに参加して一番印象に残ったことは、七ヶ浜ボランティアセンターの存在そのものでした。

まずはスタッフがみんな笑顔であったこと、そしてボランティアに来た人達が快適に、効率的に仕事に従事できるよう仕組みを工夫していることでした。

具体的にはボランティアの為にきちんと休憩が取れる施設や飲み物等を用意していることと、リーダーを決めその他ボランティアはリーダーの指示で動く仕組みです。

それにより効率的に仕事が進み、結果ボランティアの人達も貢献が

出来たと感じる事が出来るのではないかと思います。

つまりボランティアに来た人達が”また来たい”と思える環境が出来上がっていると感じました。

手探りでこの仕組みを作られたとのことですが、苦勞して、失敗を重ねて、今の形が出来上がったものと思います。

お話を聞く限りでは他のボランティアセンターと比べて、七ヶ浜は活発に活動しているとのことですが、納得です。

二日目が悪天候で作業出来なかったのは残念ですが、だからこそなのかもしれませんが機会を作りまた七ヶ浜にボランティアに行きたいと思っています。

私も”また来たい”と思った一人のようです。

[UIゼンセン同盟片倉機器労組・秋山 直美]

今回の第3次復興支援ボランティアに参加させていただき、ありがとうございました。

東日本大震災から一年を迎える日に、七ヶ浜へ来られるとは思ってもみませんでした。

ボランティア活動としては、天候の関係もありほとんど出来ませんでした。被災された方々のお話しや町の様子を知る機会をいただけたと思います。

自分の目で見た東北は、復興への道のりは長く感じました。

でも、今までの所へ戻れないと知りながらも頑張っている人達がいる。そして、その人達の力に少しでもなれる様にと活動する人達も多くいる事を知りました。

少しでも早い復興の為、これからも出来る限りの事をしていきたいと思っています。

そして、今回の復興支援ボランティアで一緒させていただいた皆さん、ありがとうございました。

[電力総連東京電力労組松本総支部・後藤 利博]

東日本大震災から丸1年経つという節目で、今回の復興ボランティアの回覧を目にし、申し込みをしたところ、職場の仲間数人と参加出来る事になりました。

震災後、東北のために何かしたいと思っていた私にとってはすごく良い機会となりました。

実際の活動時間は1日目の2時間程度で、2日目は天候不良のため作業が出来ず、不完全燃焼に終わりましたが、現地の被災状況やボランティア活動を認出来た事が良い経験になりました。

ボランティア活動を行いたいという気持ちがあっても実際に活動を行う事は難しい課題も沢山ある事がよく分かりました。

今後もボランティア活動に引き続き参加したいと思いますが、やらせて頂くという気持ちをもって臨んでいきたいと思っています。

最後になりますが、連合長野のスタッフの皆様や長電観光の方、また一緒に参加した各組織の方々、3日間本当にお世話になり、ありがとうございました。

[電力総連東京電力労組松本総支部・足利 雄太]

今回、第3次東日本大震災復興支援ボランティアに参加させて頂きありがとうございました。今回は、東日本大震災より丸1年経つという節目の日でもあり、すぐに参加を希望しました。東日本大震災以降、東北のために何かしたいと思っていたのでとてもよい機会となりました。

実際の活動時間は1日目の2時間程度ともう少し時間があればよかったと思いましたが、現地の被災状況等を自分の目で見られたことは、とてもよい経験になりました。

今後も、引き続きボランティア活動に積極的に参加していきたいと思えます。

最後になりますが、連合長野のスタッフの皆様や長電観光の方、また一緒に参加した各組織の方々、3日間本当にありがとうございました。

[電力総連東京電力労組松本総支部・上村 了一]

今回のボランティア活動には、大震災以降被災地の為に何かをしたいという思いをずっと持っていたので参加させていただきました。

今回の3日間の活動では、2日目の作業が天候不良で中止になってしまった事もあり、実質の作業的には初日に行った2時間程度となってしまう、やはりもっとボランティア活動をしたかったというのが率直な感想です。

現地の状況としてはガレキ等は数箇所を集められてはいますが、処理は全く進んでいないのではないかと印象を受けました。これからもかなりの時間を要するのではないかと思います。

大震災から1年という節目を被災された現地で迎えられたのはとても良かったと思えます。

まだまだ復興への道のりは長いと思えますが、これからも様々な形で支援していきたいと思えます。

[電力総連東京電力労組松本総支部・国島 健也]

今回の復興支援ボランティアは、天候の関係もあり、自分の思っていた様なボランティア活動がほとんどなく、正直拍子抜けだった。

しかし、私の一番の目的としていた被災地を自分の目で見ること、また感じる事ができた。現地のボランティアセンターの人々は明るく、生き生きとしていた。

ボランティアとして被災地の方々のニーズにあった活動を行うことも大切だが、被災地、またその人々を実際に見て、震災のことを忘れないことが大切だと思った。

[全労金長野県労働金庫労組・魚住 友紀]

震災から一年、テレビで見ても状況が分からない為、自分の目で見たいと思い参加させていただきました。

一日目は、つるや木の枝を切って土のう袋に詰めていく作業をしました。二日目も作業の予定がありましたが、天候が悪くなり中止となりました。

その代わり座談会を開いていただきボランティアセンターの方のお話を聞く事ができました。ここに来て状況を知ってもらい、笑顔を見せてくれれば、こっちも元気をもらえるよ。まだまだ辛い状況である中、それでも頑張って生きてく。と前を見ておられました。

一生この震災を忘れず、今回参加して、見たこと、聞いたことを周りの人に伝えていく、それが私のできることだと気付きました。

参加させていただきありがとうございました。



[電機連合太陽誘電モバイルテクノロジー労組・徳武秀明]

今回のボランティアには東日本大震災を後世に伝える大切さと、被災者が今、困っている事は何なのか、何が一番必要なのか、実際に被災地へ行き自分の目で確かめ、少しでも力になればとの想いで参加させていただきました。

まず現地に着き目に入った物は瓦礫の山があちらこちらに山積みされている光景でした。被災者にとっては思い出が詰まった財産であるはずなのに行き場がなく無残に放置されており、もしかしたら瓦礫のなかにと、あきらめきれない被災者・遺族の胸の内を思うと切ない気持ちになりました。



支援活動は震災前のきれいな海に戻すための海岸周辺の環境美化作業でしたが、被災者の元の生活に戻すにはまだまだ、長い歳月と人の手が必要と実感しました。

最終日の11日は一周忌で七ヶ浜町ボランティアセンターのスタッフにも被災者や遺族がおられることから作業はありませんでしたが、連合長野・長電さんによる慰霊祭、震災発生時刻の14時46分の黙祷で犠牲者のご冥福と一日も早い復興・再生の願いを込め帰路に着きました。

[電機連合鈴木労組・堀田 拓也]

大地震や大津波、自然の前に私たち人間はあまりにも無力だ。災害を想定する事は重要だが、しばしば自然は人間の想像を超える。

大切なのは想定内外に関わらず、起こってしまった災害に「直ちに」対処する事だ。

その意味では、今回のボランティアは時間が経ち過ぎており、その有効性に疑問が残った。

同じ志を持って集ったボランティア同士で街に繰り出し、お酒を飲み、土産を買う。それは東北経済へ寄与する良事である。間違いではないと思う。しかし、私はもっと被災者のお役に立ちたかった。

その為に参加したのだ。

2日目の座談会前の集会でベテランボランティアの方が「ボランティアは自己満足ではない！」と仰ったが、震災直後の悲惨な状況から参加しているからこそ言える言葉なのだと思う。

宮城から長野へ戻って暫く、「被災地」と「住み慣れた街」、「被災者」と「会社の同僚」等、非日常と日常の格差に多少戸惑ったがそれも薄れ、当初参加目的の未達成感が浮彫りになってきた。

私はお世話になった七ヶ浜ボランティアセンターの方から託された「震災があった事を忘れてないで欲しい。」という言葉が周囲に伝えるだろう。しかし、これだけではきっと納得できないだろう。

今回のボランティア体験は次に活かさなければならない。

[電機連合鈴木労組・坪井 博之]

今回のボランティアを通じて七ヶ浜という存在を身近に感じる事ができましたし、東日本大震災が身近に感じる事ができました。

不謹慎かもしれませんが、今までは、テレビや新聞で見ることで非常に遠い存在であり、他人事のように感じていた私です。

今回のツアーに参加させて頂いて現状を見る事ができ、1年経ってもまだまだ復旧していないのだと強く感じました。

「継続は力なり」という言葉の通り、ボランティアも一回では終わらせずに2回3回と現地に足を運びたいと思います。

「焦らず、一歩・一歩、ともに前へ」を合言葉に被災地の方々の力になればと感じました。とても貴重な体験をさせて頂き、本当に有難うございました。

[JAMアピックヤマダ労組・金子 孝弘]

私は、生まれて初めて『復興支援ボランティア』に参加しました。



バスの中から、潰された車や瓦礫の山、そして沼のような田んぼが、目に飛び込んできた。震災から1年が経つ今でも、津波による大きな爪痕が残っており、想像も出来ない津波の恐怖を感じました。

今回、私達は、宮城県七ヶ浜町で3日間のボランティア活動をさせて頂きま

した。

悪天候の為、短時間の瓦礫撤去作業しか出来なかった事が、非常に残念でした。それでも、ボランティアセンターの方に感謝して頂き、とても気持ち良かった。

この活動の中には、被災された方や、センターで常時働いている方と、ふれあう時間が多くありました。皆さん笑顔で、親切で、そして、上を向いて前に進もうとする姿が、とても印象的でした。

そんな時、私達が普段送っている『普通の生活』が、どれ程幸せな事なのかを気付かされました。

今、この瞬間も復興の為に働いている人がいて、不便な生活を送っている人がいる。

だから、「今、自分に出来る事」を、今後も続けてやっていきたいと思えます。

[JAMアピックヤマダ労組・須田 厚志]

今回初めてボランティアに参加して多くの貴重な体験をさせて頂きました。

3日間を振り返り思うことは「本当にこの3日間で被災地の皆さんのお役に立てたのだろうか?」と言うことです。

ボランティア活動については一日目の僅かな時間しか行えなかったのが非常に残念で仕方ありません。

地震、津波が来てから一年、まだまだやることは山ほどあるとつくづく感じさせられました。出来れば日本の全国民が被災地に身体を踏み入れ、自分の目で見て現地の人たちの思いを感じ

て欲しい。そしてその体験を心に刻んで欲しい。その思いでいっぱいです。

このような非現実的とも思える事態はいつ自分の身に降りかかるか分かりません。ですから他人ごととは思わず出来るだけの支援、協力は惜しまないつもりです。

被災者方のご冥福を祈ると共に今後の復興に向けて自分自身も考えていこうと思っております。

[電力総連中部電力労組長野支店支部・若月 一哲]

がれきの山が全然片付いていない現状を目の当たりにして、本当に切ない気持ちになりました。新聞記事で見かけた震災を受けた自治体職員の方の言葉が頭をよぎりました。

「この山がなくなる限り、復興のスタートラインには立てない」。

今の私には、この山がだんだんと小さくなっていくことを願うことしかできません。

あまりにも無力すぎます。どうか権力を持っている方々、きちんとしたルールを整備して、皆が納得できないまでも、一日も早くこの状況を変えていってください。

[サーブス・流通連合西友労組中部支部・渡辺 茂男]

昨年10月の第2次ボランティアに続き参加させて頂きました。

前回の活動では、基礎部分だけ残った被災住宅の土砂やガラスなどのガレキ除去作業を半日、1日半かけて松林に作業道路を作りました。2日間の作業でやれたのはほんの一部。

ボランティアセンターを下った田圃には二階だけ残った住宅や泥まみれになって横転した車などが数多く残っていましたが、5ヶ月経ったその後の状況を是非自分の目で確かめたくて参加しました。

被災住宅や車などガレキの撤去は随分進んでいましたが、新たにガレキの山も増えていました。菖蒲田浜海岸では数十名のサーファーが楽しんでいて違和感を感じましたが、“元の海岸に戻った”とのことでした。

ボランティアセンターで活動されている被災された地元の方の感謝の言葉が耳に残りました。

[JAMシチズンファイnteックミヨタ労組・岩崎 直一]

昨年のGWに、気仙沼、松島、仙台を訪れる予定でした。

今回の震災に50日の差で被災を免れました。千年に一度と云われるその確立は僅か0.01%でした。私自身、改めて運良く生かされている事を実感します。



発災直後から何かしなければと云う気持ちに駆り立てられながらも、遠隔の地でぬくぬくと間接的な支援しかできない事にもどかしさを感じていましたが、この度、東日本大震災から一年を迎える時に連合長野、長電さんを通じて被災地を訪れる事ができ、大変感謝致します。

被災地は記憶にある津波直後の悲惨な光景から、地元の皆さんや先陣ボランティアさんの献身的な活動により散乱した瓦礫は集積所に移され、家の基礎だけが残る平坦な状態となってい

ました。農地に於いては未だ手付かず状態で、境界が曖昧になった宅地跡とあわせて途方も無い虚無感が漂っていました。

復興に向けて、まだまだやるべき事が山積しているのは確かではありますが、ボランティアとしてできるその形態は、ハードからソフトへの過渡期にさし掛かっているような気がします。ささやかなボランティア作業しかできませんでしたが、七ヶ浜VCスタッフ皆さんの熱いお話を聴く中で、「ここへ足を運んでくれるだけで元気が出る」「時間の経過とともに、被災地の事を忘れないでいて欲しい」と言っておられた言葉が耳に残ります。

どうすればその思いに応えられるのか自問は尽きませんが、小職の立場で被災地域に寄り添った活動を続けていこうと2012, 3, 11, 14, 46に穏やかな好天の下、荒浜の黙禱で誓いました。

[JAMシチズンファインテックミヨタ労組・小林 秀樹]

今回、参加をさせて頂きましたことに感謝いたします。



実際に何か自分の出来ることで携わりたいとの思いの一方、1年が経過した現状では出来ることはごくわずかではないかという思いとが交錯していましたが、初日に現場を見て、自分の間違った思い込みに恥ずかしい気さえしました。

1年という節目を迎えただけで、何も終わっていないし、始まってすらいらないのではないかという気を強くしました。

私が土嚢袋に詰めた瓦礫は限りなくわずかかかもしれません。しかしこの3日間で感じ

た気持ちを持ち続け、また経験として発信し、出来ることをしながら必ずや現地を再訪したいと思えます。

[UIゼンセン同盟シナノケンシ労組・林 健治]

初めてボランティアに参加することができました。移動中に見る状況では、道路などガレキの撤去はされていましたが、ところどころに山積みのガレキがたくさんありました。ガレキの処分が進んでいないことが分かります。

住宅の基礎のみの状況だったり、住宅は残っていても、1階の窓はブルーシートが貼られている状況などを見ると、被災者の皆さんが、元の生活に戻るのは、まだ時間がかかると感じました。

ボランティア作業は、天気や日程の関係から残念ながら短時間でしたが、雨のため作業が中止となった時間で、ボランティア参加者による意見交換や、ボラセンのリーダーのお話などを聞くことができました。

ボランティア活動の必要性、範囲の広さ、運営での工夫など貴重なお話が聞けました。多くのボラセンが閉鎖され、残っているのは七ヶ浜含め数箇所となっているようです。

1度、ボランティアに参加すると、ボランティア参加のハードルが下がる。語り継ぐことの必要性。など印象に残りました。大変お世話になりました。

[UIゼンセン同盟ツルヤユニオン・関 美菜穂]

震災が起きてからずっとボランティアに参加したいと思っていて、今回参加できてよかったです。

ボランティアは初めてで、どう動いたらいいか分からず、そして天候にも恵まれず大した作業は出来ずに残念でしたが、ボランティアの方や、他のボランティアの方のお話や考えを聞けてとても為になりました。

私は最初ボランティアは自己満足で偽善のようなイメージがあり、人に行ってきたことを話したくないと思っていましたが、ボランティアの方の「話すだけでもボランティアになる」という言葉を聞いて、心にあったもやもやが少し取れた気がしました。

これだけでも実際現地に行った甲斐があったなと感じましたが、やはりボラセンの方の前向きな姿を見れたことが一番嬉しく思いました。

ただ、まだまだ復興に程遠いことは事実で。ボランティアの数も少なくなっていくことが悲しいです。

すぐに行くことは出来ませんが、伝えることだけでも続けて、風化しないよう協力し続けたいです。

[東日本大震災支援長野県民本部・高橋 幸恵] ※4月より「子どもリフレッシュ事業助成委員会」に

肌で感じる被災地は想像以上でした。

「復興・復興」と世の中は言っているけれど、実際の被災地は復興へ向けての準備をしている段階であって、決して復興が始まっている訳ではない。そう実感しました。

被災地の人々が、頑張らなくても生きていける「日常」を取り戻してもらいたい。

前を向こうと思わずとも、自然と前を向いて歩ける日が来ますように…

「忘れない事」「想いをはせる事」を大切に、無理なく続けられる自分なりの支援の形を探していきたいと思います。

そしていつか、想いを込めてまいった種の成長した姿を見る為に、またあの地を訪れたいと思います。

[組織アドバイザー・櫻田 豊三郎]

あの震災から1年がたとうとしている3月9日連合長野第3次復興支援ボランティアに参加しました。

志を同じくする47名の仲間と活動出来た事に感謝するとともに、今後も息の長い支援活動の継続を願うものです。

今回は、宮城県七ヶ浜町で活動を行ったが、確かに瓦礫や壊れた住宅の撤去等は終了し、綺麗に片付いたと見えるが、瓦礫の山が至る所に出来ただけであり、津波被害の現場に立つと、街創りや生活の基盤をどうするのか等復興に向けた多くの課題と困難さを実感しました。

まだ何も終わっていないと感じたのは、参加された皆さんが思ったのではないのでしょうか。

「この震災を風化させないで下さい」と言う被災された方の言葉が忘れられません。

社説



震災から1年

大きながれきをどけて更地になった畑に入り、手分けして土をふるいにかけていく。がれきくずなどを取り除いた後の土に、光るものが混じる。津波で砕かれたガラスだ。

2月下旬、長電観光(長野市)が企画するボランティアツアーに加わり、宮城県七ヶ浜町で3日間活動した。土ほこりのなかで作業をしなから思った。この町の田んぼや畑が再び使えるようになるには、あとどれぐらいの時間と人の手が必要なのだろう。

がれきは片付いても

七ヶ浜町は仙台市から東に20キロ、松島湾の南西に突き出した半島部分にある。昨年3月11日、田畑は海水をかぶり、流れてきた車やがれきで埋まった。

ツアーは昨年6月に始まり、8月以降は七ヶ浜町に継続して入っ

ている。現地では「長電さん」の愛称だ。

この回の参加者は35人。長野県全域から集まったほか、大阪から電車で集合場所に来た大学生がいた。半数以上が初参加で、被災地に入るのが初めてという人も少なくない。「なかなかきつかけがつかめなかつたけれど、ずっと来た」と思っていた。そう話す信大生が印象的だった。

東日本大震災から1年近く経って、思いを行動に移す人たちがいる。震災直後から自足しけつ通う人、信州から見守ってきた人。関心の寄せ方、かわり方には濃淡がある。誰も、震災のことがずつと頭から離れなかつた。そんな1年ではなかつたか。

仙台周辺は復興が比較的進んでいるとされる。目につくがれきは

支援の手緩めぬ決意

がれきの撤去や草刈り、引っ越しといった力仕事だけでなく、仮設住宅で暮らす人の生活支援、集会所の裏方、写真の整理…。地域の特性や個々の被災者の要望により丁寧な、きめ細かく応えていくことが大事になる。

七ヶ浜町で作業の後、話を伺った高齢の男性の言葉が心に残る。津波で家を失い、仮設住宅に暮らしている。「最初は(助かつて)

よかつたと言いつつ、3カ月が過ぎ、半年が過ぎ、疲れた。財産も何もない。どうすつべー」

家を流され、大切な人を亡くし、いまでも深く傷ついたままの人たちがいる。前向きな気持ちを取り戻すには、ものすごいエネルギーが必要のことだろう。

一歩を踏み出してもらえるよう、周りの環境を整えることに力

を尽くす。復興の日々に寄り添っていき、ボランティアが手伝うことは山ほどある。

たとえば、津波に流された家の片付け、がれきを撤去して終わりではない。小さなガラスの破片やがれきくずまで拾い、最後はほうきで丹念に掃く。

流された自宅の跡は見たくないと言った被災者がいる。それでも、ボランティアが徹底してきれいに

した現場を見て、もう一度ここに家を建てようかと心が動くこともある。幾度も支援に通っている人から、こんな話を聞いた。

畑の再生もそのかたにしたい。被災地では塩害で使えなくなつた田の復旧が急務となつている。家庭菜園など個人の畑は後回しになりがちだ。土を耕し作物を育てることで、未来への希望を見いだす被災者もいる。

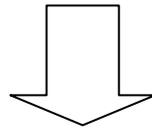
土をきれいにする作業は、1人ではしんどい。大勢で声を掛け合えば苦にならない。ボランティアの力を実感する。

被害の大きかつた岩手、宮城、福島は3県では、災害ボランティアセンターを通じてこれまで約93万9千人が活動している。NPOや企業、個人による支援も続いている。また十分ではない。さらに多くの手が必要だ。

手探りで始まつた長電観光のボランティアツアーは、きのう出発した便で25回を数えた。

<2012.3.10>

3/11付信濃毎日新聞経済面



震災が問い直した経営

東日本大震災1年 変わる県内企業

▼ボランティアツアー

長野電鉄(長野市)の旅行部門の長電観光は震災後の昨年6月に、被災地でボランティア活動をすると2泊3日のパッケージツアーを開始。当初4回を予定したツアーは、今月9日出発分を含め25回に達し、参加者は延べ700人を超えた。

参加者は東北信地方を大型バスで出発し、宮城県内のボランティアセンターの指示で民家の泥かきやがれき撤去、田畑のがれき拾いなどに取り組む。宿泊はビジネスホテルで、参加費は1人2万1千円。費用はできるだけ安く抑え、採算が合わない人数で実施した回もある。

ボランティアは交通や宿

泊食事も自分で手配するのが一般的だが、同社は「片道500円の運転や計画づくりも旅慣れていない人には大変。でも、自社が持つ旅行商品づくりのノウハウを生かせば、参加者は現地で活動に専念できる」と考えた。

三木嘉一旅行部長は「このツアーでは、参加者にごちから提供する豪華なサービスは伺もない。それでも参加する人がいて続いてきた。ボランティアしたい人の支援は、自社ができること。それを実践することが自分たちの責任」と感じている。

4月以降も4回、延長する。決め手となつたのは参加者の熱意と、七ヶ浜町側の復興への思いという。受け入れ先がある以上は続けようとした。

また何も終わらない

あの日、東日本一帯の太平洋沿岸を襲った地震と大津波、亡くなつた人は方々十人を超え、行方不明者の捜索がいまも続く。

津波や原発事故により1万8千人が避難生活を続けている。仮設住宅で暮らしている人は32万人。あす11日、震災から1年になる。まだ何も終わっていない。

しあわせ運べるように (ふるさとバージョン)

作詞・作曲 臼井真

編曲 川上昌裕

この歌の作詞・作曲の臼井真さんは神戸市内の小学校の音楽教師。

1995年1月17日の阪神淡路大震災で自宅が全壊、震災2週間後のTVニュースで変わり果てた生まれ育った街の姿を見て衝撃を受け、わずか10分で作った“神戸復興のシンボル曲”です。

歌詞の「」内は「神戸」ですが、東日本大震災の被災地に広がり、“ふるさとバージョン”として「ふるさと」又は「被災地の地名」を入れて歌われています。

インターネットで検索すれば歌を聞けます。

地震にも 負けない 強い心をもって
亡くなった方々のぶんも 毎日を 大切に 生きてゆこう
傷ついた「七ヶ浜」を もとの姿にもどそう
支えあう心と 明日への 希望を胸に
響きわたれ ぼくたちの歌
生まれ変わる 「七ヶ浜」のまちに
届けたい わたしたちの歌 しあわせ 運べるように

地震にも 負けない 強い絆をつくり
亡くなった方々のぶんも 毎日を 大切に 生きてゆこう
傷ついた「七ヶ浜」を もとの姿にもどそう
やさしい春の光のような 未来を夢み
響きわたれ ぼくたちの歌
生まれ変わる 「七ヶ浜」のまちに
届けたい わたしたちの歌 しあわせ 運べるように

響きわたれ ぼくたちの歌
生まれ変わる 「七ヶ浜」のまちに
届けたい わたしたちの歌 しあわせ 運べるように
届けたい わたしたちの歌 しあわせ 運べるように

多賀城市社会福祉協議会作成DVDのメッセージより

駅員に「昨日一生懸命電車を走らせてくれてありがとう」
って言ってる小さい子達を見た。

駅員さん泣いてた。俺は号泣してた。

ディズニーランドでは、ショップのお菓子なども配給され
た。

ちょっと派手目な女子高生たちが必要以上にたくさんも
らって『何だ？』って一瞬思ったけど、

その後その子たちが、避難所の子供たちにお菓子を配
っていたところ見て感動。

子供連れは動けない状況だったから、本当にありがたい
心配りだった。

ホームで待ちくたびれていたら、ホームレスの人達から
「寒いから敷け」って段ボールをくれた。

いつも私達は横目で流してるのに。あたたかいです。

停電すると、それを直す人がいて、断水すると、それを直す人がいて、原発で事故が起きると、それを直しに行く人がいる。

勝手に復旧しているわけじゃない。俺らが室内でマダカナーとか言っている間、クソ寒い中死ぬ気で頑張ってくれている人がいる。

NHKの男性アナウンサーが被災状況や現況を淡々と読み上げる中、「ストレスで母乳が出なくなった母親がスーパーの開店待ちの列に並んでミルクが手に入った」と紹介後、絶句、放送事故のようになった。

すぐに立ち直ったけど泣いているのがわかった。

目頭が熱くなった。

千葉の友達から。避難所でおじいさんが「これからどうなるんだろう」と漏らした時、横に居た高校生ぐらいの男の子が「大丈夫、大人になったら僕らが絶対元に戻します」

って背中さすって言ったらしい。大丈夫、未来あるよ。

26

あ と が き

東日本大震災から1年。

連合長野独自では3回目となる「東日本大震災復興支援ボランティア」は、8構成組織と2地協より募集定員をオーバーする総勢47名で無事任務を終了することができました。

ご参加いただいた皆さんと参加者を派遣していただいた構成組織・地協の取り組みに改めて感謝致します。

セヶ浜町でのボランティア作業は、悪天候で2日目午前が中止になってしまい、物足りなかったという参加者もいましたが、作業だけが目的の復興支援ボランティアではありません。参加された皆さん一人一人が現地で見たこと・聞いたことすべてを組織内の仲間や家族に話し続け、“大震災があったことを忘れないようにする”ことが一番大切ではないでしょうか。

大震災から1年経ってもセヶ浜町の復興はまだまだ始まっていないのが現実です。

連合長野国民運動・環境委員会は3月21日の「第2回委員会」で、今後の東日本大震災の復興支援先を『宮城県セヶ浜町』とし、長電観光の「復興支援ボランティア」ツアーへの参加者募集を継続して行うこととしました。(具体的な参加者募集は別途行います)

また、5月1日の長野県中央メーデーには、セヶ浜町ボランティアセンタースタッフで今回の「復興支援ボランティア」でお世話になったセヶ浜町社会福祉協議会の引地淑子さんに来ていただくことになりました。

息の長い、無理のない復興支援を継続していくために、引き続き、構成組織並びに地協の皆さんのご協力をお願い致します。

最後に、「東日本大震災復興支援ボランティア」を継続していただいている長野電鉄(株)長電観光のご努力に敬意を表すると共に、添乗員としてご苦勞いただいた三木部長と津金さんに感謝と御礼を申し上げます。

2012年 4月 5日

連合長野事務局 (成沢 勇次)

